第59期 (1958年度)



第9回全国大学ラグビーフットボール大会優勝メンバー



大阪経済大学との決勝戦

59 期メンバー

■4年生 柴田 常孝・小原 國明 中尾 禧夫・臼井 徳義 波多江康平

■3年生 藤井 忠・佐々倉為成

竹末 長人・折居 良也

小西 数哉・吉村 正男

■2年生 竹若 晴喜·小原十三雄

山見 誠・米田喜代志

■1年生 赤司 泰祐·石橋 純一

大塚 隆・江村 紀昭

乙藤 啓次・横山 嘉一

宮崎 正保・山根映一郎

第9回全国大学ラグビー大会

昭和34年1月2日~6日、名古屋瑞穂ラグビー場で開催された。

準決勝では岩手大学に抽選勝ちとなり、大阪経済 大学との決勝戦に19:14で優勝した。

☆出場メンバー

FW:佐々倉 赤司 大塚 江村 竹若 小西 藤井

石橋

HB:折居 山見

TB:竹末 柴田 小原(兄) 横山

FB:小原(弟)

全国大学ラグビー大会優勝

59期 柴田 常孝

日頃の練習は、大学前の金網の破れをくぐって修 猷館高校のグラウンドで練習した。また、このグラ ウンドは九州電力ラグビー部も時々来ていたので、 よく練習マッチをしてもらった。試合が終わって、 西南大OBが数人いたのですが、この人達から厳し く指摘され、非常にきつく、苦しい思いをした。

夏合宿は、百道の海岸の海の家「ピオネ荘」(今の 百道浜埋立地)で、朝は海岸を走り、愛宕神社まで の往復を走ったこともたびたびあり、きつかった。

今年久し振りに全国大会に出場し、しかも優勝できたことは、現役はもちろん、学校OBも非常に喜んでくれた。

西南大四度目の優勝



闘志で大経大倒す FWの捨身戦法が奏功



後半22分自陣25ヤード付近で西南TB竹末、小西からのパスをうけスタートするところ。 その後80ヤード独走、ポスト下にトライ。右は輝く優勝を遂げた西南大フィフテーン

第9回全国大学ラグビー大会最終日は、6日午後1時半から名古屋市端穂ラグビー場で西南学院大対大阪経済大の決勝戦を行った。試合は三転するもつれをみせたが、元気いっぱいの西南は15人一体となって健闘、前半FWがいくらか鋭さを欠いた大経大を下して一、二、三回大会の連続優勝についで四度目の栄冠を獲得した。

●FWの健闘が勝因

加瀬田西南大監督の話 苦しかったが、やっと勝ってくれてまったくうれしい。FWが思うようによ

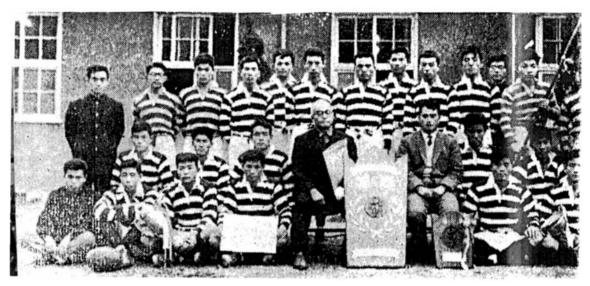
く球をとって活躍したのが勝因だが、先輩の築いた 西南の伝統をよく守ったということだけで、なにも いうことはない。

●突っ込みが物をいった

柴田主将の話 FWの健闘で勝ったようなものだ。 うちのFWには絶対信頼していた。タイトに負けて もルーズに勝つ意気込みで、出足よく鋭い突っ込み が大きくものをいった。

(西日本スポーツ新聞1959年1月7日より)

第60期 (1959年度)



1960 年卒業アルバムより

60 期メンバー

■ 4 年生 折居 良也·佐々倉為成

竹末 長人・藤井 忠

吉村 正男・小西 数哉

■ 3 年生 小原十三雄・竹若 晴喜

山見 誠・米田喜代志

■ 2 年生 赤司 泰祐・石橋 純一

大塚 隆•江村 紀昭

乙藤 啓次・宮崎 正保

山根映一郎•横山 嘉一

■ 1 年生 梶原 一彦·後藤 紀昭

津村 真祐・豊田 次朗

中嶋 崇博・花田 宣夫

松嵜 榮次·相川弁次郎

第 10 回全国大学ラグビー大会

■第1回

西南学院大27一3松山商大

■第2回(準決勝)

西南学院大 26-5 岩手大

決勝戦

西南学院大 $27\begin{pmatrix} 16-3\\11-3 \end{pmatrix}$ 6 明治学院

佐々	倉		山	鹿			
赤	司		沢	谷岩	1	T	1
大後	塚藤		大伊	塚沢	2	G	0
竹	若	FW <	三	木	 1	Р	0
小	西		高	頭	16	前	3
藤	井		渡	辺	1	T	1
石	橋		柳	沼	1	G	0
折山	居見	HВ	深垣	谷木	1	Р	0
竹	末		一後	藤	11	後	3
豊	田	TD	八	木	27	計	6
Z	藤	TB <	北	畑	2	反	16
横	山		、大	峡			
小	原	FB	田	井			

ラグビー王国支える郷土勢 敵より早く走り抜け

<西南大の巻>

松林を通して玄海の寒風が猛烈に吹きまく るグランドでは西南大のフィフティーンが黙 黙とボールを追っている。

ホイッスルが鋭く鳴り「右! 左!」という サインの掛け声が短く飛ぶ。全国大学ラグ ビー大会は新制になってからこれで5度目の 出場、しかも3年連続優勝という名門西南大 の練習は全く気合に満ちている。



ラインアウトの練習をする西南大の FW

高校界の一流選手はほとんど中央の大学に 進学するのが現状であり、しかも八幡製鉄、 九電で代表される社会人と、修猷館、福岡高 で代表される高校とのちょうど中間にあっ て、地元大学ラグビーはともすれば影のうす い存在になりがちだ。この点西南大のメン バーにも名門校の出身者は一人もなく、高校 時代にラグビーの経験のなかった者や地方の 高校の目立たぬ選手によって固められている そうだ。それだけに選手の努力もなみ大抵で はない。

八幡製鉄の土屋氏は「同志社、関学といった関西の一流チームと戦っても見劣りせぬいい試合を展開するだろう」と批評していた。

代表決定戦では地元のライバル福岡大に 40 - 0 と圧勝、また社会人の王者八幡製鉄 のベストメンバーとの対戦スコアが 15 - 11 の惜敗、九電ともいい勝負をするという戦跡 ぶりからみてもその実力がうかがわれるだろう。チームの中心はFWの藤井、佐々倉とバックスの竹末。FWは後藤を除きみな大会の経験者というのが強味。

軽量ながら藤井主将を中心にガッチリとまとまっている。バックスは両 WTB の 75 キロ、100 メートル 11 秒台という突進力が目立つ。しかし山崎コーチが「エースがいるとどうしてもそれに頼るようになるから、うちは各人がその性格に合ってそれぞれベストを尽くすようにしている」といっているように、"特徴のないチーム"が西南大のチームカラーといえる。

こじんまりしているがFWとバックスのバランスもいい。藤井主将は「部員の不足でタイトスクラムも組めないが、かえってチームワークはよくなりファイトも湧いてくる」といっている。

第一戦の相手は連続10回出場の記録を持つ強豪松山商大だが、対戦相手にかまわず優勝を目標に、とにかく相手より早く走りぬくだけだと、大会出場の経験者が12人もいるところから選手全員が充分認識している。また、4年生全員は卒業後の就職も決定して、あとはラグビー一本にうち込むだけ、しかも朝日招待ラグビーで来福する関東大学の覇者法政大との対戦を実現させようとOBが努力しているとあって、猛烈に張り切っているわけだ。

藤井主将は「マークされて、よそから追われる立場だが、FWのドリブル突進を第一に

生かし、チャンスにバックスに球をまわす オーソドックスな戦法でいくが、要するに敵 より早く動きまわることだ」といっている。

充実した力からして優勝もそう難しくなさ そうだ。 (「フクニチスポーツ」より)

全国大学ラグビー

西南大が連続優勝 5度目明治学院を一蹴

第10回全国大学ラグビー大会最終日は、 6日名古屋市瑞穂ラグビー場に高松宮殿下を お迎えして午後1時30分から西南学院大-明 治学院大の決勝戦を行った。力、技ともにす ぐれる西南大は後半バックスの快走で大きく 明治学院を引き離して快勝、昨年についで連 勝するとともに通算五度目の優勝を飾った。

西南学院大 明治学院大

佐く	?倉`		山	鹿					
赤	司	·FW <	沢	谷					
大	塚		大	塚		1	Τ	1	
後	藤		伊三	沢		2	G	0	
竹	若〔		三	木		1	P	0	
小	西		高	頭	_	16	前	3	_
藤	井		渡	辺	_	1	Т	1	_
石北	橋居		柳	沼谷		1	G	0	
折山	店 見	HB <	深垣	台木		1	P	0	
竹	末		後	藤	-	11	後	3	_
豊	田	TD	八	木	-	27	計	6	_
乙	藤	} TB {	北	畑		2	反	9	
横	山	l	、大	峡			12		
小	原	FB	田	井					

◎……前半風上に陣した西南はしばしば キックを利用して地域を奪取、有利に試合を 進めた。8分に明治学院FWのこぼれ球を後 藤がドリブルでひっかけて初トライをあげた のを契機に、13分にはTB攻撃を左右に展 開して明治をゆさぶった。ゴール前25ヤー ドのルーズから藤井→山見→横山と素早いパ スを回して横山が中央へトライ(ゴール)、



【西南学院―明治学院】前半34分、ゴール前のルーズから西南右オープンに回し、TB 横山タックルをはずして右中間にトライ

明治学院の機先を制した。しかし明治学院も 風下の劣勢にかかわらず持ち前のFWダッシュの威力を発揮し、再三ゴールにせまり西 南をゴール前に釘づけさせたあと、スクラムトライして反撃した。ただこのFWの突進以外に決め手がなく、その後挽回するチャンスを作れなかった。そればかりか、すぐ西南の猛攻にあって守勢一方に追いつめられた。西 南は24分にもTB竹末が左ラインぞいに独走して明治学院をおびやかしたあと、25分には10ヤード付近中央からのPGを決め、さらにハーフタイム寸前にも横山が右中間に飛び込んで前半をリードした。バックスの足を生かしたあざやかなトライであった

◎……後半に入っても西南はこの調子を持ちつづけ明治学院の反撃を許さなかった。10分横山が3度目のトライを右すみに押さえた後も13分PG、21分FWパスで藤井と、一方的に攻撃をつづけた。明治学院は28分に西南TBパスをインターセプトした大峡が約70メートル独走してトライを返したにすぎなかった。明治学院としては押され気味の為かオフサイドが多く、また西南のつぶしにあって満足なTB攻撃が一度も出来なかった。

(「西日本新聞」より)

為さんも逝く…… 「平成17年7月5日」

60期·竹末 長人

楕円形を通じて汗を流し、泣き笑い楽しい多くの思い出を与えてくれた同期の友、故折居良也、故藤井忠、そして為さん「佐々倉為成」まで、走って走ってハーフタイムもノーサイドの時間など、ゆとりも持たずに人生を走り抜いて逝ってしまった。……悲しい。

西南ラグビーOB会長8年間、先輩後輩の 人望厚く、大きな足跡を残したが、つくり残 したのが部史だと言っていた。その思いの部 史の完成を見ることなく逝った為さんの霊前 に、一番に届けたい。俺も誇りに思う。

俺宛てに亡くなる6ヶ月前に届いた部史へ の為さんの考え、ラグビーに対する思いが遺 稿となってしまった。

次に佐々倉君の遺稿を紹介する。

西南大学ラグビー部「部史編纂」の経緯について

60期·佐々倉 為成

平成12年の部、総会にて、会長として初めて「ラグビー部史編纂」の議題として提案させていただき、以来5~6年の経過の中で、初代委員長の斉藤守高先輩(主に専門学校時代を担当)から、引き継がれた坂本譲委員長のなみなみならぬ労力と時間を使われたご努力によって、また委員の方々のご協力により立派な部史が出来るであろうことに対し、心から深い感謝と敬意を申し上げる次第

です。そもそもの議題の提案の動機は、昭和3年の創部時のメンバーの舟曳先輩が、他界された時に先輩所蔵の写真、当時の戦歴の新聞記事等が、多数に、ある人を通じて私の手元に届きまして、それを斉藤守高先輩に見ていただきました。

「当時を知る人も少なくなってきた。非常に貴重なものだ」と速水伝吉先輩や創部時の こと、専門学校の時代のこと等のお話を聞か せていただき、非常に感動いたしました。

70 周年の記念行事も終り、80 周年迄には なんとかなるだろうと、他学校で作ってい らっしゃる立派なものではないにしても、今 手がけておかないと正しい正確な歴史が、後 輩に伝わっていかないと思いを提案させてい ただいたわけです。部史編纂の目的は、「西 南学院大学ラグビー部の歴史を再認識し、後 世に歴史を伝え、物故者の霊前にこれを捧げ るとともに、若きラガーマンの飛躍の糧とす る」と議事録の中に記されております。

流月流水はとどまることなく過ぎて行きますが、西南大学ラグビー77年の歴史もその中にあります。しかしながら、その年代々で刻まれた歴史の重みとそれが生み出した熱き想い出は、何ものにも変える代えることはできない青春の貴重なものです。

西南ラグビー精神は、故河野博範教授ラグビー部長の部歌にある「正義」と「闘魂」と 「愛」ではないでしょうか。

歴史と伝統を受け継いだ現役諸君が、苦難 の道を乗り越え、また輝かしい歴史を作ら れ、いつの時代かまた新しい西南ラグビー部 史が出来ることを願ってやみません。

今後のラグビー部の発展を心からお祈りしております。

第61期 (1960年度)



1961年卒業アルバムより

61 期メンバー

- ■4年生 小原十三雄・竹若 晴喜 山見 誠・米田喜代志
- ■3年生 赤司 泰祐・石橋 純一 大塚 隆・江村 紀昭

乙藤 啓次・宮崎 正保

山根映一郎・横山 嘉一

■2年生 梶原 一彦·後藤 紀昭

津村 真祐・豊田 次朗

中嶋 崇博・花田 宣夫

松嵜 榮次

■1年生 田中杉太郎·平田 正勝

藤原 稔・上田 照夫

第11回全国大学ラグビー大会

■九州地区大学ラグビー大会

11月19日~21日(於 長崎グラウンド)

組合せ結果

•11月21日 準決勝戦

西南学院大17-6福岡大

鹿児島大 15-12長崎大

この結果、西南大・鹿児島大が全国大会に九州 代表として出場。

•11月23日 決勝戦

西南学院大27-0鹿児島大

(西南) 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2

TGP前TGP後計反

■全国大会

昭和36年1月2~6日(於名古屋瑞穂ラグビー場)

1月2日 1回戦 西南学院大13-6明治学院大

1月4日 準決勝 愛知学院大14-9西南学院大

ちょっと遠い昔の夏合宿の思い出

61期. 竹若 晴喜

西南ラグビー80周年記念に際して試合のことなどは記録のページにゆずるとして、わたしの学生時代の青春のひと時を思い返してみました。

2004年9月19日、昨夜来の強い雨もあがって 9月とはいえ真夏を思わせる強烈な日差しの中、 長崎県大村市の自衛隊竹松駐屯地に降り立った。

今日は小学生の西九州大会が開催されるとのことで、九州各地はもちろん、沖縄からの参加もあって大勢のちびっ子ラガーたち(稚園児から小学6年生まで)とその父母をはじめ各学年のコーチたちが自家用車をはじめ多数の貸し切りバスを連ねて集結した。

そこで、周囲を見まわして40数年前の当時とは景観もまったく変わっていて、なんと、なんとと驚いてはいたが、この日差しと風が運ぶ土と草いきれの中で、ある見覚えのある建物を目にしたときあの当時の夏合宿の時期にタイムスリップした。

走れっ! 当たれっ! 出せっ! 激しい声が飛び 交い、体と体がぶつかる音、飛び散る汗、ボール に向かって集まるスパイクの音、グランドに体を 投げ出すセーヴィングの音、パックして入れ!右 にパス!よしハイパンいくぞっ!FW走れっ!8 番、もっと深めにフォローせんかっ!

竹松自衛隊との練習試合の一こまであった。

わたしが西南学院大に入学したのは1957年4 月であった。筑紫ケ丘高校入学と同時にラグビーと出会って(半強制的に入部させられて)高校卒業によりラグビーとは縁を切るつもりでしたが、西南には一級上の折居先輩がおられたこともあって再びその縁が続くことになった。また、山崎勇視先生が西南へ新任で赴任されたことも何かの縁があったのでしょう。 大学の練習はどんなものかと不安な気持ちで部室に行って驚いた、練習に出るメンバーが10人から12,3人ということで、まあ授業時間の関係で止むを得ないことなのだろうと思っていたが、毎日の練習のメンバーが何人かはいつも違っているので、なかなか名前が呼びかけにくいなど、たまに15人そろうと何か窮屈な思いを感じるというおかしな時期でした。

山崎先生は日体大でキャプテンを勤められたということで精悍な顔立ちとがっしりとした体形に似合わずグランドを離れると上級生のように親しく話しをしていただいたのはついこの前ことのように感じています。

西南での最初の夏合宿はわが母校の筑紫ケ丘高校も参加しての合同合宿となったが、西南大は12,3人でした。 しかし、シーズンに入ったらメンバーも何とかそろって試合にも臨むことができました。

翌年には西南高校から5名の入部があり、この 新人たちはグランドでいつも練習をともにしてい たので、なんら違和感もなく練習にも活気がみな ぎり、ようやくチームとしての体裁も整ってき た。当時の春の練習といえば百道海岸の波打ち際 (現よかとぴあ通り)を走り、電車通りに出て室 見橋を渡って愛宕神社の石段を登り、裏側の坂道 を下ってまた来た道をグランドまで帰り、そこで またグランドを何周も、何周もインターバルを繰 り返し、さらに仕上げはグランドの対角線ダッシ ュを何回も繰り替えしやっと上がりとなった。こ の対角線ダッシュとインターバルは、陽が落ち暗 くなるとボールを使っての練習の時期になって も、シーズンに入っても繰り返された、おかげで 試合では走り負けることはなく、スタミナには自 信を持っていたものでした。

また、竹松駐屯地においての一次目の夏季合宿 でもこの走れ、走れの練習が継続されたことは言 うまでもありません、滑走路脇のランニングは照 り返しがまぶしく、周りが平坦で折り返し点や ゴールは見えているのになかなかたどり着かない のがもどかしく普段より強い疲労を感じたもので した。

スクラムの練習では、当時まだ残っていた掩体 壕(戦闘機などを格納していた)の斜面でのスク ラムの練習、これがまた大変でした。前3人、そ してロックをつけて5人が下から相手を頂上に押 し上げる、押し上げたらまた下から押し上げるま でを幾度も繰り返したものです。こんな厳しい練 習の合間にもほんのちょっとした休める時間があ った、それは午後5時に国旗、隊旗がラッパの吹 奏にあわせて降納される、そのときは練習中で も、試合の最中であってもその場で直立不動の姿 勢をとることになっていましたのでこれがなんと もいえない一息つける貴重な時間でした。

夏の合宿は二次にわたっておこなわれ、二次目は大学構内の米国人教授の空き宿舎に宿泊していたある年のこと、グランドをスタートして地行を通って大濠公園を1周してグランドに帰ってくるランニングがあった。

ある日、H田が〇塚に「〇塚さんに途中で追い 抜かれとらんとに、先に帰り着いとうとはおかし い」とクレームをつけたが、上級生の〇塚が「追 い越されたのに気がつかんやっただけたい」と一 蹴したが、H田のクレームもH田を含めた以降の 走者は遅れてきたペナルテイでさらにグランドを 数周走らされたので無理からぬことでありまし た。後日、意外な真相が明らかになりました。

またある年の合宿の最終日に八幡製鉄(当時) との練習試合が合宿の疲れと暑さにまけて大敗 し、河野広範先生からこんなぶざまな試合(戦い)は相手に対してこれほど礼を失することはない、どんなときでも全力、全霊を傾けて試合に臨むように、との厳しいお叱りを炎天下のなかで宿舎の前に正座して受けたことも、しびれた足の痛さによく耐えたものだと夏の日差しを見ると時々 思い出すことがあります。

このように西南大でのラグビーは走れ、走れの連続しか印象に残っていないようですが、やはりボールを追いかけて走りに走ることで、タックルで相手を倒すことができるし、ラック、モールができるポイント、ポイントに相手よりも早くしかも多くのプレーヤーが集まることでボールを守り、またボールを獲得し、ボールを繋ぎトライにつなげるための基本であると今でも思っています。

あのころから 40 数年を経過して、ルールも大きく変わり、より速い展開とスピード、パワーを要する競技へかわり、また負傷交代や戦術的交代が認められるようになって、パワフルなプレーがノーサイドの笛が鳴るまで見られるようになりましたが、昔のように15人対15人での体力、気力を尽くしての6-5とか3-0のようにone tryを競う「死闘」と呼ばれるような試合が懐かしく思われます。

当時グランドで元気な姿を見せておられた数多くの先輩の皆さん方の中でも、鬼籍に入られた方も多いなかでも1961年末、速水伝吉元監督を事故で失ったことは大きな損失でありました。とくに、その年の名古屋では準決勝で敗退し3年連続優勝の機会を逃したので、最上級生として責任を果たすことができなかったのが申し訳なく、残念無念の気持ちが今でもこみ上げてきます。また、ともに汗を流し、声をかけ励ましあった仲間ともなかなか会う機会が少なくなった。折居良也先輩が他界されて10年近くなり、今年は藤井忠、佐々倉為成のお二人の身近な先輩があいついで他界されたことはまことに残念であり寂しいことです、お亡くなりになった諸先輩がたのご冥福をお祈りいたします。

つたない文章で申し訳ございません。これはあくまでも私自身の"思い"でありまして、中には 思い違いなど多々あると思いますお許しくださ い。お読みいただいたかたがそれぞれに過ごされ た時代のこと、西南ラグビーのことなどを思い起

こしていただく一助になれば幸いです。

当時の状況

ない。

福高、 新島 枚の切り札があれば東京の いる。 京あたりの大学に匹敵する実力を持って 実力だったと思う。 したが、 んでも決してそん色はない 高校は九州のトップクラスにある ただFWはいいがバックにもう一 熊工など全国大会二回戦で姿を消 全国的にみてA級の下くらいの 西南はりっぱだ。 一流大学と並 東

しましたが、

相対的な批評を。

—八幡製鉄、

西南大とも全国大会で連勝

高校はA級の下

九州ラグビー界の力量

新島清氏に聞く

ずば抜けた八幡製鉄

新人を加えて新しいメンバーの新練習に 入るが、九州ラグビー協会新島清理事に ビーもひとくぎりついた。各チームとも シーズン回顧をお願いした。 |地域対抗をさいごに今シーズンのラグ 西南大も好成績あげる

> 堅い 西南優勝 小じんまりした鹿大

的バランスのとれたチームといわ そろい、出足もよく、FWの押しを たりの動きが優劣を占う一つのポイ 田が新しく入っているので、この どこというアナがない。ハーフの花 でTBは左から松崎、豊田、 藤井)石橋。ハーフ団が花田、 れ、FWが梶原、赤司、大塚、江村 ントだ。しかしバックローは選手が FB小原と並ぶメンバーには 第三列津村、竹若(もしくは も連勝をねらっている。比 過去二連勝の西南大はことし 乙藤、

(「西日本新聞」昭和35年12月)

の小原の快速は定評があり、 そう。センタースリーの豊田、

第

F B 戦

きかせればあるていどカバーはでき

に合う明治学院大戦がヤマ。

昨年も

決勝戦で会って勝っているがことし

も勝てる条件が多く、優勝も夢では

第62期 (1961年度)



1962 年卒業アルバムより

62 期メンバー

■ 4 年生 赤司 泰祐・石橋 純一

大塚 隆・江村 紀昭

乙藤 啓次・宮崎 正保

山根映一郎・横山 嘉一

■3年生 梶原 一彦・後藤 紀昭

津村 真祐・豊田 次朗

中嶋 崇博・花田 宣夫

松嵜 榮次

■ 2 年生 田中杉太郎・平田 正勝

藤原 稔・上田 照夫

■ 1 年生 神山 隆·高橋 勝

中村 陽一・長野 輝夫

松下 顕成・安武 佑光

木村 興一・橋本 昭

末石 光栄・広田 興宣

第 12 回全国大学ラグビー大会戦績

■九州地区大会 11月22日~26日

於:熊本自衛隊グラウンド

◎準決勝

西南学院大 44 $\begin{bmatrix} 18 - 0 \\ 26 - 3 \end{bmatrix}$ 3 九州歯大

長崎大 $40 \begin{pmatrix} 19 - 0 \\ 21 - 3 \end{pmatrix}$ 0 鹿児島大

◎決 勝

西南学院大 18 $\begin{bmatrix} 12 - 0 \\ 6 - 5 \end{bmatrix}$ 5 長崎大

■全国大会 1月3日~6日

於:名古屋瑞穂ラグビー場

◎1回戦

◎準決勝

◎決 勝

西南学院大 $22\begin{bmatrix} 3-0\\19-2 \end{bmatrix}$ 0 愛知学大

速水監督追悼試合 西南大が大勝 対福大ラグビー 定期戦

西南大-福岡大ラグビー定期戦が去る7日 交通事故でなくなった西南大ラグビー部監督 速水伝吉氏の追悼試合として10日福岡市平 和台ラグビー場でおこなわれた。

試合は西南学院大が36-0で大勝した。

西南学院大
$$36\left(\begin{array}{c}14-0\\22-0\end{array}\right)0$$
 福岡大

江	村	1	/水	野	
赤	司		田	中	
大	塚		厦	Ę.	
梶	原	Texa.	浜	\Box	
田	中] F VV S	糸	井	
上	田		鴨	田	
後	藤		清	原	
石	橋		門	田	
花	田	l IID .	船	津	
豊	田	J HB ,	\竹	末	
神	山\		片	岡	
乙	藤	TD	淀	Ш	
長	野	(I b	和	田	
横	山/	J	河	合	
松	崎	FB	仲	吉	

1	T	0
1	G	0
2	P	0
14	前	0
2	T	0
2	G	0
2	P	0
22	後	0
36	計	0
5	反	10



後半 11 分西南大 F W のラッシュから後藤左中間にトライ

伝統の一戦とあって福岡大は闘志を燃やしたが、FW、バックスともに西南大が一枚上。 2分FWのドリブルから右中間に先制のトライ。12分にはSO豊田が突っ込んでゴールに成功、以後豊田の好キックによって加点し前半を終わって14-0と引き離した。

(「西日本新聞」昭和 36.12.11)

西南大ラグビー 後任監督に南川氏

西南大ラグビー部OB会では 故速水伝吉監督の後任に9日 午後、南川昌一郎氏(36) =24年卒、不動産業=を決 めた。西南大はことしも北



南川監督

九州代表として新春の全国大会(名古屋瑞穂)に出場するが速水監督の急死で同日の告別式後直ちに緊急学会を開き速水監督の意志どおり"戦後卒業の若い人"を選考したもの。速水新監督は西南大が戦後23年から全国高専、大学大会28連勝したときの主力選手だった人。

南川監督の話 なにしろ突然のことで、私自 身驚いているような次第です。しかし速水さ んの遺志を受けついで、伝統ある西南大とし てはずかしくないようやっていきたい。早速 全国大会が控えているが、学生とも相談して 計画をたてていこうと思う。

正月恒例の第12回全国大学大会は3,4,6 の3日間名古屋瑞穂ラグビー場で行われる。 大会は西日本地区の西南大が強く優勝が予想 されている。

大 学

実力随一の西南大長崎大、決勝進出の夢も

西南大は今年も強い。参加8チーム中、まとまりのある点では随一のチームである。昨年のこの大会ではTB乙藤の故障で愛知学大(東海、北陸)に敗れ優勝を逃がしたが、今年はそんなことはあるまい。八幡製鉄、九電などの相手チームに恵まれ練習量も多く、今度優勝すれば六回の優勝という歴史をもつことになる。

◎縦の突進にすぐれる

このチームの特長はまとまりがあり、総合力もかなり強い。特に縦の突進力にすぐれ、 ルースからの早いタマ回しによってスタンド オフの豊田が裏に積極的にでてチャンスをつかむことが多い。とくに豊田は大きな得点源でカンのいい動きはすばらしい。ウイング横山は足があるから走り回れば相手チームも手がでまい。

メンバーに上から江村、赤司、大塚の第一列、第二列が梶原、田中、バックロー上田、後藤、石橋、ハーフ陣は花田、豊田、スリークオーターは左から神山、乙藤、長野、横山と並びFBに松崎である。

(「西日本新聞」昭和 36.12.31)

第12回全国大学ラグビー

第12回全国大学ラグビー大会九州地区大会は、11月22日から26日までの3日間、 熊本市健軍町の陸上自衛隊西部方面総監部の グラウンドで行われた。26日の最終日は西

南大と長崎大とで決勝戦が行われた。

西南学院大 18 $\begin{bmatrix} 12 - 0 \\ 6 - 5 \end{bmatrix}$ 5 長崎大

西南大は前半長崎をノート ライに押さえ優勢に戦いを進 め、後半は長崎の必死の追撃 を振り切って優勝した。

西南大6度目の優勝 愛知学大にトライ許さず

第12回全国大学ラグビーフットボール大会最終日は、6日午後2時から名古屋市瑞穂ラグビー場で、西南学院大(北九州)―愛知学大(東海、北陸)の決勝が行なわれ、西南大が6度目の優勝を遂げた。



突進ならず 〈全国大学ラグビー〉西南大―愛知学大後半6分、愛知 学大陣25ヤード付近で西南大横山、愛知学大杉山の タックルにはばまれる

試合は前半愛知学大は西南大に1トライを 許しただけで接戦だったが、後半は力の差が はっきりあらわれ、西南大の一方的な試合と なり、結局22-0と西南大が大きく離して 勝った。

西南学院大 爱知学院大

西南、あざやかなオープン攻撃

【評】前半なかばごろまで風上に立った愛学大が激しいファイトで食い下がっていた。 ところが25分西南は愛学大陣25ヤード付近のルースから出たボールを愛学大右のWTB 松井がゴール前でパントした、これを西南左 バックロー上田がチャージしてそのまま突っ 込み中央にトライした。

後半風上の西南は次第に調子をあげた。一 方愛学大には疲れがみえ出しFW、バックス とも動きがにぶくなった。12分愛学大陣25 ヤード付近の愛学大ボールのセットをものに した西南はWTB神山が左隅にトライ、これ を皮切りに17分、20分、24分、25分と足 のある TB があざやかなオープン攻撃でトラ イをかさね、一方的に試合を進めた。愛学大 はバックスのタマ離れが悪くチャンスをつぶ していた。FB 井上の欠場で経験のない青山 が出場したが、西南バックスの力強い突っ込 みには手がでなかった。

(「西日本新聞」より)

堂々6度めの優勝飾る 文字どおり全国大学のピカー

昭和3年誕生というから歴史は古い。戦前 西南学院高等部のころから全国高専大会に出 場、西日本地区のラグビー名門校として知ら れた。戦後新制大学となって高専大会も全国 大学ラグビー大会と改められたが、高専大会 から大学大会をつなぐ間に7連勝の快記録を うちたてた。またことしの第12回全国大会 には九州第一ブロック代表で出場したが、初 戦からあぶなげない試合運びで全国の強豪を なぎ倒し、6度目の優勝をなしとげたことは 記憶に新しい。

ところで、このチームの特徴はバックス、 FW ともに強力なこと。75キロの体重をい かして走り回る横山をはじめ神山、長野の突 進力は定評があり他チームを問題にしない。 また FW もセカンドローこそ新人だが、主



故速水監督の遺影を中に西南大学ラグビー部

将の大塚や赤司らを中心にまとまり、縦の 突っ込みはするどい。ハーフ団も全九州のメ ンバーにも選ばれた豊田がいて、たくみな オープン攻撃をみせる。第12回大会ではこ うした突進力をいかんなく発揮して優勝した が、これで関東、関西各大学を除く全国大学 の中で文字どおりピカーとなったわけで、今 後の期待も大きい。

なお同大会には自動車事故でなくなった速 水伝吉前監督の遺影に「我々の試合を速水先 生がスタンドより見守っていただいたので勝 ちました」と報告するなど、うるわしい話題 をなげた。

(「西南スポーツ」より)



日の決勝の対愛知学大の 事故で失ったばかり。六 **受章をつけて試合した。** 試合ではスタンドに速水

昨年十二月八日に時 専大会で鳴らした西南の名口 ック、卒業後すぐに母校の監 代をきずいた人。大会 みをかくして黙々と練習 前、急に速水ざんをなく 督となり、 ものにした。 したチームは、その悲し していたが、見事優勝を

ったが、これで地下の速水塩 真は速水監督の遺影を持って ょう」と誤ぐんでいた。=写 督にも客んでいただけるでし 君は優勝層を手に「自信はあ 〇…キャプテンの大塚

●想い出の記

『我が青春に悔いなし』

62期・乙藤啓次

先日昼下がり、ソファーでうとうとしている時、珍しく江村君から電話があった。

「体調はだいぶん回復してきた。ご飯も食べられるようになり、お酒も飲めるようになった。また、昔のように皆で飲みに行こうや

という話まではよかったが、ラグビー創部 80年部史の原稿が62期だけ未だ出ていない のでお願いしたいとの依頼であった。

私とラグビーとの出会いは、西南学院高校2年生で体力的にも、精神的にも強くなりたいという時であったように思う。鞘ヶ谷競技場での大学・高校合同の初合宿で52キロの体重が1週間で5キロ減った記憶がある。

毎日が下痢症状で、初日から100本くらいのオールメンダッシュ等、それは大学生が逃げ出すほど凄まじいものであった。その合宿中に先輩から『ラグビーは15人でするとバイ』と言われたことが今でも頭から離れないでいる。

大学では、4年間で全国大会に4回出場し、 3回優勝と今思えば大変恵まれた境遇であったと感謝している。その全国大会で私がどう しても忘れられない試合が2試合ある。

その一つは、私が3年生時の試合である。 西南ラグビー部では、過去全国大会に出場したら優勝して帰って来ると言う伝説があり、 年代は異なるが5連覇中であった。その伝説 は何時かは破られるとは思っていたが、その 年とうとう破られてしまった。責任の一端は 私にもあったと思っている。1回戦の対明治 学院大の試合で私は肘を脱臼してしまった。



今は選手交代が出来るが、当時は負傷退場したらそのまま少ない人数で試合を続けなければならなかった。その試合はどうにか勝つことが出来たが、準決勝で地元の愛知学大に初めて敗れてしまったのである。4年生の先輩の目標であった連続優勝の夢を砕き、下級生としては今でも悔いの残る試合であったと思っている。

もう一つは、翌年の最上級生時の決勝戦である。地区予選後の年末に、速水監督が交通 事故で亡くなられ、その遺影を抱き、喪章を 付けての試合だった。対戦相手は前年不覚の 一敗を喫した愛知学大だったが、22対0で 勝ち堂々の優勝を果たすことが出来た。

速水監督への霊に報いることが出来、また 前年の雪辱を果たし大学生として有終の美を 飾ることが出来『青春に悔いなし』といった 気持ちだった。 振り返り、この時代このような成績を残せたのは、諸先輩のご指導・ご支援はもとより、ラグビー部長の山崎勇視先生のご指導のお陰だと思っている。私たち学生の指導者として、また、練習が終わると兄貴のように親しく接していただき、苦しい時でも何時の間にか頑張れる雰囲気を作って貰っていたように思う。

個々人のやる気を基にしたチームワークと 練習の積み重ねの大切さを知ったことは、私 のそれからの生き様に少なからず影響を及ぼ したと言っても過言ではない。

最後に我が人生の良き友である大塚主将・ 赤司・石橋・江村・横山・宮崎・山根の同期 生諸君、そして後輩の諸君、ご厚情に感謝し ます。



第63期(1962年度)



1963年卒業アルバムより

63 期メンバー

■ 4 年生 梶原 一彦·後藤 紀昭

津村 真祐・豊田 次朗

中嶋 崇博・花田 宣夫

松嵜 榮次

■3年生 田中杉太郎・平田 正勝

藤原 稔・上田 照夫

■ 2 年生 神山 隆·高橋 勝

中村 陽一・長野 輝夫

松下 顕成・安武 佑光

木村 興一・橋本 昭

末石 光栄・広田 興宣

■1年生 石井 一雄·梅山 高弘

伊達 成昭・山口 雅弘

吉田源次郎

第 13 回全国大学ラグビー大会

■西南大、総合力で随一

組み合わせ

岩北 愛天 松 長 西 成城大

西南大は参加8チーム中、まとまりのある点では随一。6年連続、9回目の出場。うち6回も優勝しており、今年も優勝候補の第一にあげられている。とくに縦の突進力にすぐれ、ハーフ団には全九州のメンバーに選ばれた豊田がいて、ルースからの早いタマ回しによって積極的にオープン展開を繰り広げ、チャンスをつかむことが多い。このカンのいい豊田の動きのほかに神山もよく、FB 松崎もライン参加ができるので相手チームも手がでまい。

一方、FW はセットの前への押しこそやや弱いが、ラインアウトには自信をもち、後藤を中心とするバックロー3人は昨年と同じメンバー。鋭い出足で相手のSOの動きを押さえるにちがいない。順当にいけば決勝戦でFW のセットに強い岩手大と顔が合うが、社会人の八幡や九電にもまれているだけに、西南に六分の利がある。FW のメンバーは上から梶原、末石、伊達の第一列、第二列が杉森、田中、バックロー上田、後藤、津村、ハーフ陣は平田一豊田、スリークォターは左から神山、長野、山口、広田と並び、FB に松崎がいる。

◆◆◆◆ 栄えの第7回西日本スポーツ賞受賞す!!◆◆◆◆



栄えの受賞者

前列向かって右から細石、高木、竹村氏代理荒井、山 中八代水泳協会長、豊田西南大ラグビー部主将、広田 嘉穂高剣道部主将、池田の諸氏

輝く記録と功績を讃えて 第7回西日本スポーツ賞贈呈

西日本スポーツの発刊を記念して制定された第7回西日本スポーツ賞贈呈式は21日午前10時半から福岡市の"クラブ九州"で行われた。受賞者は細石憲二(プロゴルフ・下関ゴルフ場主任プロ)竹村茂孝(柔道・九州柔道協会委員長)高木恒夫(水泳・九州水泳連盟理事長)池田博志(レスリング・徳山市桜ヶ丘高三年)の個人4氏と八代水泳協会(会長山中栄一氏)西南学院大学ラグビー部、嘉穂高校剣道部の三団体。いずれも日本のスポーツ界を代表する個人ならびに団体で、会場はスポーツマンらしい息吹があふれていた。贈呈式はまず弘中西日本新聞社社長(代読)から「輝かしい記録や功績をたたえたい。皆さんの足跡はスポーツ界の道標となたい。皆さんの足跡はスポーツ界の道標とな

るでしょう。こんごも日本スポーツ界のため ご活躍を祈ってやまない」とあいさつ。つい で釘町西日本新聞社運動部長から選考経過の 報告があって具島専務取締役からはえのス ポーツ賞(賞状およびレリーフ)が贈られ、 その功績をたたえた。このあと鵜崎福岡県知 事(代読)、安川福岡県体育協会長の祝辞に つづき受賞者を代表して山中栄一氏から「喜 びにたえない。これを契機に記録の向上、選 手の養成に努力したい」とお礼のことばが述 べられ、花束を各選手代表におくって贈呈式 を終わった。式後、スポーツ関係者、受賞者、 西日本新聞関係者などが出席して昼食会にの ぞんだ。

西南学院大学ラグビー部豊田主将の話

思いがけないことで全員大喜びです。自動 車事故で咋冬なくなられた速水前監督がおら れたなら、さぞかし喜んでいただけるだろう と思うと胸がいっぱいです。全員でこの感激 を霊前に報告するとともに今後もがんばりま す。

(「西日本新聞」より)

全国大学ラグビー大会・戦績

【一回戦】

西南学院大 $16\begin{pmatrix} 8-3\\ 8-0 \end{pmatrix}$ 3 成城大



成城大対西南学院大の後半26分、成城陣前10ヤード付近のルースから西南TB長野、球を得て突き込んだがゴール寸前で成城大のタックルにつぶさる

[評] 第1試合は期待された成城大にスピードがなく、キック力を生かして1トライを先行したものの、西南大の手がたいプレーに盛返され、成城大は体重、速力ともに申し分のないバックスの力を出し切れないままに試合を失った。西南大は集散の早いFWの活躍とスタンドオフ豊田の好プレーで完全に成城大を押さえた形だった。

【準決勝】

西南学院大 $14\begin{pmatrix} 3-0\\11-0 \end{pmatrix}$ 0 長崎大

[評] 西南学院の強さは群を抜いている。 試合開始と同時に長崎陣内に深く攻め入り、 再三得点機を迎えた。ことに25ヤードのラ インアウトから左にオープンパスを展開した



西南大対長崎大。後半24分、西南大HB豊田、長崎 大陣ゴール前のルースから右すみに飛び込みトライ

好機は、WTB神山が左スミのフラッグ寸前でラインを踏み越さねば完全に先制トライとなったはず。とにかく第一戦の対成城戦より一段と鋭くなっていた。一方、長崎大もFW陣の検討を楯によくがんばった。FWは早い集散と鋭い突っ込み、バックスは強いディフェンス、タックルで西南の早い動きに対抗し続けた。

西南は15分ようやく中央25ヤードの地点から豊田がPGを決めて先制に成功したものの、前半ついにノートライ。得点のTB攻撃はすっかりマークされていて後半になってもなかなか出ない。初トライもFWだった。後半19分、ルースから出たボールを上田が拾い、津村がフォローして右中間にとび込んだ(豊田ゴール)もの。当たりの強いディフェンスで、後半の押しぎみに試合を進めた長崎もこの追加点でがっくりきた。西南はすかさず24分、豊田がこぼれダマを拾って右中間に押さえ、時間切れ直前にもFWで得点するなど一気に振り切った。長崎は西南のTB攻撃を最後まで抑えながら西南の総合力、勝負強さに屈した。

西南大1トライに屈す 岩手大が初優勝飾る

【決勝戦】

第13回全国大学ラグビーフットボール大会決勝は6日午後2時から名古屋瑞穂ラグビー場で西南学院大(北九州)と岩手大(東北)の対戦で行われた。岩手のFWが押しまくって西南に好機をつかませず、前半一進一退で0-0、後半は岩手のペースで進み、岩手が28分左スミに決勝のトライをあげて初優勝した。

岩手大
$$3\begin{pmatrix} 0-0\\3-0\end{pmatrix}$$
0 西南学院大



評:決勝にふさわしい好試合だったが "猛牛" といわれる岩手の FW は期待どおり押しまくり、西南に好機の糸口をつかませなかった。前半11分までのセットで岩手のとったボールは 11、西南は 1 で圧倒的な FW の差があった。風上の西南は豊田のキックで攻め込む作戦だったろうが、FW が岩手にタマをとられて手のほどこしようがなかった。しかし岩手も FW がものにしても西川、熊倉のハーフ陣の判断の悪さなので得点することはできなかった。前半チームのチャンスと



岩手大対西南学院大、後半28分、西南ゴール前15ヤード付近のセットから岩手左オープンに回し、岩手作山が左スミに決勝のトライ

いえば4分岩手 CTB 吉田が中央のルースからのタマを西南 25 ヤードライン内まで突っ走ったのと、西南が 13 分ラインアウトから大きくけって岩手 25 ヤード内に攻め込んだ1回ずつで、中央線をはさみ一進一退で前半を終わった。

後半、じりじりと攻めほとんど西南陣で試合が進み、完全に岩手のペースとなった。12 分、14 分、20 分と岩手は左コーナーフラッグ直前にタッチキックする好機もものにできなかった。しかし 28 分西南ゴール 10 ヤード前でのセットから西川一熊倉一作山とパス、作山が左スミにとびこんで決勝のトライをあげた。岩手のすさまじい FW の押しと当たりに西南がすっかりのまれたかたちで好機をつかむキーポイント豊田にたまが回らず、うまくオープンに回ってもあせりからボールが手につかず完敗してしまった。岩手は準決勝で天理大に捨て身でぶつかって勝ち、とくにFW が自信をつけたのが大きく、試合ごとに強力となって初優勝した。

我が青春の思い出 ……西南ラグビー

63期·後藤 紀昭

小生は昭和34年、西南学院高校卒業と同時に西南学院大学ラグビー部に入部する。小生は無試験推薦入学で早くから合格が決まっていたので、2月頃から既に大学の練習に参加していた。後から入部してきた花田宣夫や豊田次朗は、最初は小生を先輩と思ったらしく、後に二人から「先輩面をしやがって」と顰蹙を買ったのを覚えている。当時1年生(63期)は、珍しく10数名入部したと思う。結局、最後迄残ったのは豊田(4年時主将)、花田、津村、松崎、梶原、中島(マネージャー)、小生の計7名である。

大学の春の練習が始まり、とにかく走らされた。当時のヘッドコーチは山崎勇視先生(後の教授、ラグビー部長)で、日体大を出たばかりのバリバリの若手指導者であった。我々は陰で鬼と呼んでいた。

「体格で劣るお前達が勝つには、相手より 走り勝つ以外にない。タイトで不利なら、と にかく走り勝ってルースを支配しろ」

とにかく、春は走るに徹した。

そして、あの地獄の夏合宿がやってくる。 今でも灼熱の太陽が照り輝く夏になり、盆が 近づくと、盆明けの夏合宿が始まることを思 い出し、胸がキューンと詰まる思いである。 今でもトラウマになっているようだ。

竹松自衛隊、八幡製鉄、干隈合宿所等のこの4年間の夏合宿は、正に地獄の苦しみであったが、フィジカル、メンタル共に徹底的に鍛え抜かれたと思う。あの合宿で我々を、

真の自信をつけ、確実に強くなったと信じて いる。

昭和35年から昭和38年迄の4年間の正月は、我々は毎年、名古屋、瑞穂の全国大会に出場した。内2回優勝出来たが、2回失敗している。それ迄は、出場即優勝という記録を続けてきた先輩諸氏に顔向け出来ない。伝統を途絶させてしまって申し訳ないという気持ちであった。

小生が秘かに自慢していることがある。対 福大戦で小生の在籍4年間で一度も負けてな いことである。対福大戦は、攻めて、攻め て、攻めまくり攻撃は最大の防御であった。 福大に負ける訳がない。何故なら我々は毎年 毎年、福大の2倍の練習と2倍の走り込みを やってきたのだという自負はゆるぎなかっ た。ある年、福大の諸先輩が、今年は西南を 押さえて30点差をつけて、今年は絶対、福 大が勝つと豪語されたという。しかし、現実 の試合は、30対0で我々が零封した。実に 痛快な思い出である。毎年毎年、補強して常 に60名以上の部員を有する福大と、多い時 で30名そこそこの我が西南とでは、見た目、 その戦力は歴然とした差があるのは明白であ ろう。しかし、我々には、練習の内容量では、 絶対に負けない自信があった。

もう一つ、一寸残念な思い出がある。昭和34年のシーズン、当時、日本一の八幡製鉄との公式戦である。ロスト・タイムに入り、1トライリードされていた折、K先輩がゴール前でもの凄いスピードでパスを受け、中央に回りこんで逆転と思った瞬間のノックオン。「噫々、残念也!」今でも同期と飲む時の語り草になっている。一度、日本一の八幡製鉄に勝ちたかった。

我々西南ラガーは、死ぬ思いで、事にぶつかり、絶対にギブ・アップはしなかった。今や遠い時代となったあの4年間、正に青春の真っ只中であった。懐かしい限りである。無我夢中でやれるものがあった。それがラグビーであった。今思えば、西南ラグビーこそ我が青春であり、悔いのない時代であった。

いざや 酌まん 勝利の美酒を 西南ラグビー 永遠なれ!

我がラグビー人生

63期·豊田 次朗

西南ラグビー創部80年、おめでとうございます。

本史創刊にあたり、原稿作成の依頼を長野(65期) 君より受け、固辞しましたけどどうしてもと言う事で引き受けることにしました。

凡そ50年近く前の記憶を呼び戻しなが ら、ペンを取らせてもらった次第です。

私とラグビーとの出会いは、父(教学繁雄) が戦前の強豪、朝鮮鉄道でフッカーとしてプレーしてたということです。

親子二代のラガーマンという訳で、当然大きくなればラグビーをやる環境にあり、年子の兄(筑紫ヶ丘高校、九州電力)が先にはじめていましたので、後に続いたという次第です。

筑紫ヶ丘高校では3年間 F.W フランカーでした。西南大学に入っての練習初日、当然 F.W グループの方へ行こうとしたところ、 先輩の折居さん、竹若さん(共に筑紫ヶ丘高校)から B.K に行くように言われ、足も速

い方では無かったし、いきなりの、C.T.Bで 大変驚いたのを覚えています。

1,2年生では左センター、3,4年生の時はスタンドオフとしてほとんど全試合出場したのではないかと思います。

その間、九州の大学相手では練習試合を含めて1度も負けた記憶はありません。

正月の名古屋での全国大会では1年生で(昭和35年1月)で優勝、2年生(昭和36年)で愛知学芸大学だったと思いますが、初めて敗れました。翌3年生(37年)では雪辱を果たし優勝、4年生(38年)では決勝で0対3で岩手大学に敗れ最後の年を飾れなかったのが残念でした。

その後、近畿日本鉄道に入社し、スタンド オフとして7年間プレーさせて頂き、社会人 大会で三度優勝、と大きな怪我も無く14年 間楽しくラグビー人生を送れました。

それも西南ラグビー魂、すごい練習量、そ して先輩、同僚、後輩といずれも素晴しい仲 間に出会ったお陰だと感謝申し上げたいと思 います。

振り返って在学四年間で一つだけ不思議に 思う事があります。それは毎年シーズンイン から正月のシーズンオフ迄、ほとんどの試合 のメンバーが不動だったという事です。

当時ルールは交代や入れ替えが無い時代でしたから、1年間を通して誰も大きな怪我をしなかったという事、今では考えられませんがこれは日頃の練習の賜物だったんだろうと思います。

近年、筑紫ヶ丘高校も、西南大学も、近鉄も、 低迷していますが、それぞれのチームが以前 の強いチームに1日も早く復活してくれます ことを祈念して私の思い出といたします。

「スタンドオフ物語」豊田次朗(西南学院大学、近鉄)

ラグビーマガジン社の編集した「スタンドオフ物語」(1997年8月号)に、豊田次朗君が登場する。以下、その記事を紹介する。

昭和38年から社会人の強豪・近鉄のSOに西南学院大から入社した豊田次朗が起用された。学生時代、全九州に選ばれてはいたが、ほとんど無名といってもいい存在のSOである。その豊田がその後の7年間、近鉄の欠かすことのできない戦力となって、全国社会人大会3回優勝に大きく貢献した。

当時の社会人ラグビーは、八幡製鉄、近鉄のビッグ2がしのぎを削って戦った時代で、高校出の選手を含め両チームとも、濃度の高い練習量で素晴らしいチームに磨き上げられて、日本のトップレベルの選手を輩出していた。「強くなるには練習しかない」とだれもが固く信じていたときで、泥臭いハードな練習を黙々とこなしていたものである。

近鉄の中島監督は、立命館大から朝鮮鉄 道で活躍した HO で、昭和23年にオックス フォード大と対戦した全日本に2回出場した 息の長い実力派である。しかし、新しいラグ ビー理論が入っていたわけではなく、その 戦法は FW がひたすら押しまくり、獲得し たボールを SO のキックで前進するというも の。

「相手ゴールライン近くでやっさもっさも みあってトライを狙う。見ていてもちっとも 面白くないラグビーだった」と豊田もいう泥 臭いものだった。したがって実際にボールに 触れてプレーするものは、FW8人とHB2人 で「10人ラグビー」といわれたものである。 豊田はひたすらハイパントを上げたり、タッ チキックをしたり、相手の守りの薄いデンジャラスゾーンへ狙いすまして蹴りあげる役目を演じていた。

宿敵・八幡製鉄に何度も跳ね返されてきた 近鉄のラグビーが、同大から石塚、坂田、早 大から犬伏が入ってきて、10人ラグビーか ら脱皮。ボールを回し脚力を使ってオープン にも展開する戦法をとるようになったのが昭 和40年頃である。そして昭和42年1月8日、 秩父宮でトヨタ自工との決勝戦を勝って社会 人のチャンピオンの座に着いた。5年振りの 優勝の喜びの中に、八幡がチーム力の減退で 準決勝で姿を消した。

そのうち、豊田は近鉄ラグビー部現役の7年間、旧花園ラグビー場スタンド下の合宿所で生活していたが、窓ガラスが破れ夏の夜は蚊の襲撃で眠れないという劣悪な環境の中でも、練習はだれにも負けないくらい積み重ねた。

そして試合においては、息も抜けない、全身全霊を注ぎ込むゲームの経験を積み、近鉄にとって欠かすことのできない SO になっていった。持ち前のキック力は単にアップアンドアンダーのハイパントだけでなく、相手の一番嫌がるスペースを瞬時に読み取り、コントロールよくそこに蹴り込む技術は天下一品といってよかった。

まもなく 57 歳になる豊田は、東生駒駅前にある近鉄ケーブルネットワーク株式会社の常務さんとして活躍しているが、近鉄ラグビー部 OB 会幹事長として、近鉄のゲーム観戦を欠かさない。「我々 OB は現役チームには一切何も言いません。だけど、厳しい練習を積み重ねないと強くならないという信念に変わりはありません」と語っている。

■昭和 45 (1970) 年社会人大会 (22 回)



・1月4日於花園

近鉄 $17\begin{pmatrix} 13-0\\5-8 \end{pmatrix}$ 8 トヨタ自工 神野 (関大)

優勝メンバー

後列左より、坂田(同大)、大久保(法大)、谷口(布施工)、小笠原(弘前実業)、犬伏(早大)、鎌田(法大)、永村(花園)、豊田(筆者)、神野(関大)

前列左より、越久 (美馬)、今里 (中央大)、石塚 (同大)、川崎 (布施工)、原 (東洋大)、田中 (花園)

豊田次朗の私のスタンドオフ論

----豊田さんのラグビー歴を教えてください。

豊田 福岡の筑紫ケ丘高でラグビーを始め、西南学院大、そして近鉄に入って7年間、合計14年間プレーしました。私の父親(秋子繁雄)が戦前の強豪・朝鮮鉄道のラグビー部でHOとしてプレーしていて、知葉友雄監督のもとで鍛えられています。

——最初から BK だった……。

豊田 いやいや、高校時代はFW だったのに、西南学院に入ったらいきなり CTB やらされてね。面喰ったけどそれ以来 BK ですよ。でも当時の西南学院は強くて名古屋・瑞

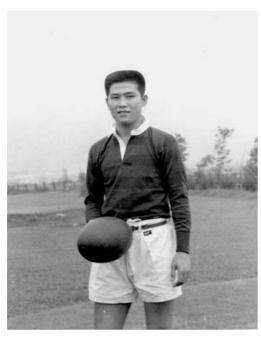
穂での地区大学大会に何度も優勝していた し、私が在学中九州の大学には一度も負けて いません。

――近鉄入社は何年ですか。

豊田 昭和38年です。そしてライバルは 全盛を誇っていた八幡製鉄で、八幡をどう やって倒すか、それしか考えない毎日だった な。

――入社当時の近鉄は?

豊田 FW がぐいぐい押して、出てきたボールは相手の22メートルラインに入るまで徹底してキックを上げてFW がなだれこむという泥臭いものでしたね。だからSOはデンジャラスゾーン目掛けて蹴るとか、アッ



昭和38年、近鉄時代の筆者

プアンドアンダーのハイパントを上げるとか、見た目にも面白くないトライ(笑)を上げるラグビーでしたよ。

――今でも社会人の競ったゲームという と、その戦法が使われていますよね。

豊田 当時の近鉄FWは本当に強くてね。 グングン押してくれるFWは実に頼もしかっ たな。

-----中島監督のラグビーの原点はスクラム だった……。

豊田 その通りです。畠山(中山)、川崎とか、あの時代のフロントローは毎日物凄い量のスクラムを涙流して組んでましたものね。中島のおやじはその背中の上を乗りまくって、「コラーっ、高い」ってやってました(笑)。それに比べると、今の近鉄FWのスクラム組む数はかなり減っている感じだな。

――そんな厳しい近鉄の練習が続いた訳ですが、SOとしての豊田さんはどういう練習

を積んだのだろう……。

豊田 試合中にプレッシャーを受けてのハイパントというのは、かなり難しいものでね。今と違ってオフサイドラインはボールの位置だから、あっという間に包まれるようにタックルされる。SH がちょっとでも遅れると両 FL と SO が突っ込んでくるわけです。今と違ってアーリータックル、レイトタックルなんて厳しく取らない時代でね。

――そうだった。

豊田 だから、必ずディフェンスをつけて厳しい状態の中で蹴る練習を重ねましたね。 当時はトライ3点、PGも3点、同じ評価でしょう。だからPGの価値が高い。したがってプレースキックの練習は常にやらなければならんわけで、よくやったな。私は足の骨が折れましたよ。いわゆる疲労骨折というやつです。気がつかず、風呂に入って酒屋へ一杯やりにいこうとしたんだけど、歩けなくなりましてね(笑)。昔のボールは重いし、わざと雨降りとか下が濡れているとき重点的に練習したりね。

――あのとき近鉄が強かったのは、いい人 材が集まったことに加え、練習量で他のチー ムに絶対負けなかったことがあげられるね。

豊田 ええ、そう思います。今と違って情報が入ってこず、他がどんなことやってるのか知らないんだけど、八幡に勝つための練習なんだと思ってました。個人練習はやりたいヤツはやっていたという感じだった。京都から通っていた組は、片道夫々2時間かかり毎日6時起き。でも彼らは立派に毎日練習してました。ライバルに勝つにはその3倍の練習が必要。その頃はこんな考えでした。

――キック練習で疲労骨折する選手なんて

いないものね。

豊田 それにしても私は強い FW を前にしてラグビーができたこと、ラッキーだったと思いますね。この前ワールドの試合を見たとき痛感したのだけど、ワールドの FW が押されっぱなしで、オールブラックスの SHマッカーンとジャパンの SO 松尾の HB が、なんにもできないんです。実際 FW が押し込んでくれると、SO は 180 度の視界が広がるのだけど、押されると半分の 90 度になってしまう。

――なるほど。

豊田 FW のラックの中に巻き込まれたとき、怖かったのはむしろ味方 FW で(笑)、何されるか分からないほど激しかったですからね。

――今の時代の若い SO に求めるとした

ら、どういうことでしょう。

豊田 ゲームをやって勝ちたいのか、どのくらい勝ちたいのか。それを知りたいときがあります。ゲームに負けたのに終わって笑っているプレーヤー、結構いますね。私どもは有名選手を相手にするときほど、ぶっ倒してやれと燃えたものだけど、負けたとき悔しくてしょうがないと思う選手が多いチームほど強いんです。大久保なんて負け試合になったらえらいことになったものね。味方も危険を感じるほど悔しがったですよ。

――なるほど。

豊田 その意味で、我々は激しい練習の毎日がいやだと思ったことはなく、ラグビーは勝つためにプレーするんだという思いに徹して戦ったから取るで、幸せな選手生活を送れたと信じてますね。



1963 年全国大会、中央右が豊田 名古屋・瑞穂グラウンド



左より上田、豊田、長野 名古屋市内にて

第64期 (1963年度)



1964 年卒業アルバムより

64 期メンバー

■ 4 年生 田中杉太郎・平田 正勝

藤原 稔・上田 照夫

■3年生 神山 隆・高橋 勝

中村 陽一・長野 輝夫

松下 顕成・安武 佑光

木村 興一·橋本 昭

末石 光栄・広田 興宣

■ 2 年生 梅山 高弘・伊達 成昭

山口 雅弘・吉田源次郎

石井 一雄

■ 1 年生 黒小 恒美·津田 国典

大江 健志・大神 信隆

城戸 秀幸

戦績

西南スポーツで「西南体育会の双璧」 伝統と栄誉に輝くラグビー部として紹介 され、西南学院全ての期待をかけられ る。

県大学リーグでは、西南学院大 44-0 八幡大と順調に勝ち進み、西南、福大、 九工大、九歯大と共に、鹿児島での九州 大会に出場する。しかし、インカレの1 回戦で福大と対戦し完敗、全国新制大学 大会への出場を逃がす。

福大 $14\begin{pmatrix} 6-0\\ 8-0 \end{pmatrix}$ 0 西南学院大

インカレ

第13回九州地区大学体育大会

本学の6連勝か?

本学ラグビー部は、夏季休暇中、干隈グランドと大村市の自衛隊キャンプで、2回にわたる合宿を行い、かなりの成果をあげた。昨年度の全国大会決勝戦では岩手大に惜敗しているだけに、部員一同今年こそはの意気に燃え、毎日練習に励んでいる。

昨年のレギュラーメンバーの中、5人も抜 けてしまったことが、今シーズンのチーム戦 力の低下と、いつもと同じ部員不足という結 果を招いている。今シーズンの部員は18名 (その内、マネージャー2名)で、一人でも 負傷者が出るとすぐに戦力に響いてくるとい う最悪の状態である。FW陣では主将の上田 を中心に梅山(2年)、鶴田(1年)、伊達(2 年)、大江(1年)、大神(1年)など、これ からのラグビー部を背負ってたつ新人の活躍 が大いに期待される。本学西南の誇るバック ローには FW リーダーの上田 (4年)、田中 (4年)、松下(旧姓杉森3年)と、九州の 大学ラグビー界随一の脚力を持ち、このバッ クローを軸とした西南ペース(ハイスピード ラグビー)で他を寄せつけない。HB陣では、 全九州ナンバーワンの豊田(現近鉄)が欠け たことから来る、バックス戦力のマイナスは 隠せない。が、新人とは思えない1年の黒小 の頭脳的プレーと、ハーフ平田 (4年) との 息の合ったコンビネーションに大きな期待が かけられている。また TB 陣は、木村(3年)、 安武(旧姓秋重3年)、長野(3年)、神山(3 年)と昨年のメンバーがそろっており、これ が大きな得点源となるであろう。



FB には、TB 攻撃にも参加できる好プレーヤー山口(2年)を擁し、相手の突進を阻まんとしている。

日頃の猛練習と、チームワークの良さから、6連覇が大いに期待される。

(「西南スポーツ」より)

■結 果

第13回全国大学ラグビー大会九州地区大会は、11月30日からの3日間、鹿児島大学のグラウンドで行われた。

○第1回戦

福大
$$14\begin{pmatrix} 6-0\\8-0\end{pmatrix}$$
0 西南学院大

[試合経過] 前半相手に3ペナルティ(うち2コンバート成る)を与える雑な試合運びで6-0とリードされた。後半も収支押され気味に進み、本学としては非常に苦しい試合となった。特にFW陣の調子が悪くTB・FB陣に球がまわらず時間の経過とともにあせりが目立ち個人プレーが多くなった。前半同様、後半も2トライ1ゴールを与え8-0で福大リードのまま試合終了。結局14-0で対福大戦に完敗し全国大会出場は成らなかった。

第13回九州地区大学体育大会(インカレ)冬季大会結果

曲がり角にきたラグビー部

実力の差痛感

第13回九州地区大学体育大会冬季大会は 鹿児島大学を当番校に11月30日から12月 3日まで勢戦を繰り広げた。

参加 19 校とも本年度最後の大会に闘志を 燃やしサッカー、ラグビー、柔道、駅伝の各 種目で"勝利"を競い合った。今大会では3 種目に優勝の福岡大が圧倒的強みを見せた。

本学は各種目に完敗を喫した。特に、6連覇は固いと思われていたラグビー部が対福大戦に敗れたことは、好、不調というより実力の差であることを痛感させられた。近年全てのスポーツに好選手を揃え台頭してくる福大に対し、部員不足に悩む本学との差であるともいえる。この点で、ラグビー部の敗戦だけを責めることは酷かもしれないが、本学全体の期待をかけられている部だけに残念な気がした。

ラグビー部の敗戦は西南学院大学の敗戦であり、これを契機に体育会はもとより学院全体の問題として当事者、関係者の一考を促し体育会再起を頼みたい。

■国際親善ラグビー

福岡学生選抜チームに本学より6名出場

福岡市を訪問したニュージーランド巡洋艦「ロイヤリスト号」乗組員と福岡学生選抜、全福岡両チームとの国際親善ラグビー試合が、24日午後2時から約1.000人のファンが集まり晴天に恵まれた平和台競技場で行われ全福岡、福岡学生選抜両チームがそれぞれ快



勝した。

本学より伊達、田中、上田、松下(旧姓杉森)、神山、長野が出場。

福岡学生
$$47\left(\begin{array}{cc}21-0\\26-5\end{array}\right)$$
 5 ロイヤリ 選 抜 $47\left(\begin{array}{cc}21-0\\26-5\end{array}\right)$ 5 スト号 B

[戦況] ロイヤリストBは動きにまとまり がなく、脚力の点でもはるかに劣っていた。 体力にものをいわせての突進だけでは外人 チームと初対戦するというので合宿練習まで して大張り切りの福岡学生選抜チームには通 用しなかった。

5分長野の突進からフォローした上田が左中間に先制トライ(ゴール)した福岡学生軍は11分には江本が快足を飛ばし、17分には杉森、24、34分には上田がトライ。21 - 0の一方的なリードで前半早くも勝利を決定づけた。

後半も福岡学生軍のスピードに圧倒されて ロイヤリストBは防戦一辺倒、7分、FWの 突進からチャンスを見いだし、アナニナが右 中間にトライ(ゴール)したのがロイヤリス トBの唯一の得点だった。



ニュージーランド巡洋艦「ロイヤリスト号」乗組員と 福岡学生選抜軍の対戦

■松山商大遠征ラグビー

9月4日

於: 九大グラウンド

西南学院大 44 - 13 松山商大

(「西南スポーツ」昭和38年9月4日より)

「38年度九州ラグビー展望」より

66期・石井 一雄

昭和38年12月9日付の西日本新聞は本年度の「九州ラグビー展望」として、高校・大学・社会人の戦績と正月大会についての座談会の記事を載せている。そのうち西南関係分を記載する。

大学では「今年は例年出場していた西南大が、九州大会で敗れ、新たに福大と鹿大が出場するが…」、新島(九州ラグビー協会理事)「西南大の力が落ちたからですね。福大はいままでムラがあって苦戦したが、最近それがなくなった」

吉田(福大ラグビー部監督)「いままで西南大には伝統があるから強いと言われてきた。そこで伝統とは何かを究明すると、根性ではないかという結論に達した」

門田(福高ラグビー部長)、社会人では「近 鉄と八幡製鉄が決勝ということになればおも しろい。近鉄のFWは強力だし、製鉄にひ とアワふかせようと張り切っている。豊田(西 南大出)も入ったし」

今年、11回目の全国大会出場する九電について、新島「九電はこれまではバックスに決定力がなかったが、今年は走れるようになった。HB団も前に出るので鋭さがついた。そして中田(西南大出)をFBにさげたこともよく、その好判断と走力は大きなプラスとなっている」九電には戦前・戦後に加勢田先輩をはじめ幾多の先輩が活躍する。今年のメンバーの中に、中田・小原・江村の西南出先輩がいる。九電には後に、上田幸造君(68期)が活躍する。

第65期 (1964年度)



1965 年卒業アルバムより

65 期メンバー

■ 4 年生 神山 隆・高橋 勝

中村 陽一・長野 輝夫

松下 顕成・安武 佑光

木村 興一・橋本 昭

■ 3 年生 石井 一雄・梅山 高弘

伊達 成昭・山口 雅弘

吉田源次郎

■ 2 年生 黒小 恒美・津田 国典

大江 健志・大神 信隆

城戸 秀幸

■ 1 年生 上田 幸造・案浦 誠一

木津 岩光・下寺 達夫

日永田克也

戦績

前年度、インカレで福大に敗れ、通算 18 回目の九州制覇をのがし、体育会はもとより学院全体にショックを与えた。汚名挽回のために練習に励んできたが、福岡県大学リーグにおいて、福大に 13—14 で(詳細は次ページ)、九大にも敗れて、インカレの出場をのがす。インカレの結果、福岡県から九大、県外から鹿大が全国大会に出場し、九大は準決勝で東洋大に 3—12 で敗れる。鹿大が 9—6 で東洋大に勝ち優勝。

福岡地区大会 予想

王座奪還なるか

冬の代表的スポーツ、ラグビーのインカレは来る12月4日から3日間宮崎大学グランドで開かれる。本学は11月15日、九大グランドで行われるその予選で、福岡大学と対戦する。

事実上の優勝戦である。去年のインカレの前に、6連覇なるかと大いに期待を寄せられながら、宿敵福大の前に14 - 0と無念の完敗を喫してしまった。曲がり角に来たかとまで言われたラグビー部がその汚名挽回にどのように対処するかが見ものである。しかし、目標は当然打倒福大。そしてもう一度、本学の手に優勝旗が帰ってほしいものだ。彼ら部員の顔にはとにかく福大に勝つということしかない練習一色の毎日である。練習でみせるようなファイトをそのまま試合にもっていけば福大も問題ではなくなるだろうし、優勝の喜びにひたるのも目前ではなかろうか。

まずFW陣フロントローでは好プレイヤー 伊達(3年)、下寺(1年)、上田(1年)、 を擁し、西南FWの壁を築いている。セカン ドローでは2年生コンビの大江、大神の活躍 が大いに期待されている。バックローでは、 FWリーダー杉森(4年)、ファイター木津(1年)、秋重(4年)、とその脚力は他の大学を 寄せつけない。HB陣では2年目を迎え、進 境著しいSO黒小(3年)とハーフ吉田(3年) との息の合ったコンビでTB陣への要をなし ている。今年から画期的なルール改正により オープンプレーが要求されるのであるが、そ の本学の誇るTB陣では主将長野(4年)、 好漢山口(3年)を軸としWTBには俊足神 山(4年)、木村(4年)、を擁しその脚力、 突進力は定評のあるところである。FBには 好守の日永田(1年)が相手の突進を阻まん としている。

このように個人個人を見ても立派な選手が 多いし、全般的にみても長野主将を中心によ くまとまっている。チームワークの良さと日 頃の猛練習で、晴れの舞台を飾ってほしい。

(「西南スポーツより」)

福岡大学に惜敗

どこへ行った「往年のラグビー」

10月15日九大グランドでインカレ予選が行われた。本学は福大と対戦、前半の失点が大きくわざわいして13-14で惜敗した。昨年の雪辱を期して、1年間インカレ優勝のため練習に練習を重ねた部員の努力は徒労に終わってしまった。

福岡大 $14\begin{pmatrix} 9-0\\5-13\end{pmatrix}$ 13 西南学院大

○メンバー

FW 伊達・下寺・上田・大江・大神 杉森・木津・秋重

HB 吉田・黒小

TB 神山·長野·山口·木村

FB 日永田

試合は福大のキックで始まり、前半は風も影響して全く福大ペース 15 分、36 分と続けざまにトライ、さらに本学のペナルテイに乗じトライと前半は9-0で福大リード。後半に入っても4分早くもスクラムからトライ(ゴール)され14-0とその差は開いた。このあと8分ごろようやく本学は敵陣ゴール前のラインアウトからのボールを福大ハーフ

がパスミス、ゴール内に転転とする間に安武 (旧姓秋重)よく飛び込んでトライ(ゴール) さらに 11 分ルーズからのボールを山口オー プンに大きくパントをあげ、CTB 長野これ を引っかけ、フォローした神山このボールを 拾って左スミにトライ。このころは完全に本 学ペース。ほとんど敵陣で試合を進めた。20 分にも自陣 25 ヤードのセットスクラムから のボールを福大パスミス、これを拾った神山 70ヤード独走し中央にトライ(ゴール)こ こにいたって得点は13-14とその差1点と 迫った。勢いに乗った本学は福大を攻め、再 三ゴール寸前まで追い込んだが、そのたびに ペナルテイを取られ、逆転のチャンスを失っ

ていった。そうこうする内時間は刻々とす ぎ、逃げ込もうとする福大、追い込もうとす る本学と両者必死の攻防を続けたが、ついに 時間終了。本学は無念の涙をのんだ。

なお今大会の優勝は鹿児島大、準優勝は九 州大 (九大は福大に大勝) で九州の大学ラグ ビー界は大いに変わりつつある。鹿大、九大 の天下は当分続きそうである。それに反し本 学は来年レギュラー選手六名を放出せねばな らず、全部員は十五名となり、来年は最悪の 危機に達する。これでは練習も思うに行かな いであろう。推薦入学とかの何かいい方法は ないものか。

(「西南スポーツ」より)

とれ、当時の私達とまた適った一時。当時今は亡き遠水監督 女子学生の草やかな着物姿に見 どうしの励まし、さらに終しい ュマンあるいはフレッシュウー 職池をはっきりと身に縁じると。で、閃霞の椎関学、同志社を苦 れて聞く四名の頭から写学生の う……。**美人の和服姿で**我にか こには若い西南からほとばしる とができた。四年間、フレッシ 懸傷にひたってしまったが、そ ることができた。 やかな場面に接す ちようど三十八年 事で学校に行くと 師弟の挨拶、友人 い、式の前のなど 度の不業式に出会 らちに夕食を終えたが、選征以 習を取ねた結果、恵まれぬ人以 勝した。その日は特別に門限十 には、先に帰ったM先輩(先輩 事を知っているので『よし、二 しめた猛者連ばかり。またたく 新制大学ラグビー大会で『『理優 も入っている。 さらに悪いこと (三十六年事故死)のもと猛線 のすごく監督の気嫌が悪い

昭和二十九年卒

中

田

主 基

の

目

を

てくることであろう。 三月二十七日、私

生れる練選、そして希望が称い れに打ち勝つ忍耐と、そとから の困難もあろうが、君選にはそ かけている。その前途には機多 きた事に、佑螺は非常に別待を

固なものとしてきたのである。

樊績が一本一木の柱となって、

力を続け築いてきたそれぞれの

t:... 生 K 活

から「離か!今頃!」ときた。

私は玄関の前に立って思い出し ようやく二階へという時に背中 スパイクで、しかもポイントの の目標をたて給え。それは身近 職地する西南の
基礎をさらに
競は
玄関の
すぐ
横である。
玄関の
情けなくなってくる。
予想通り
れはいつまで
も続いていない。 昭和二十九年正月、私選は全国もちろん遅刻組に環上級生の私した。汝遠水監督は、環後の判まで環轄をつくして、 ていた。悪いことに監督の部屋 隣の奴らが突っていると思うと びもあり失望もあり、決してそ 戸をスーッと開けた。抜き足で 頭にカツンときた。

興気をもってたゆまぬ研究と分とでもあり、門限に凝刻した四 せ、次に予想される。気合い人 区切りがある。区切り区切りが に、徐々にではあるが、資命と 理にくわしくないことと夜のと 勝の喜びもいつの間にか得え失 てみれば、時の流れは一つ一つ 名を除き、みんな卓めに帰宿し れずに哲シュンとしている。二 方である。しかし、内心ホッと なものでよい。その目的を最後 勝負である。区切りごとに、 新入生諸君ノ学生々活に一つ 、カー杯や

特に西南学院を選んで入学して

入学おめでとう。

* 54年期(昭和29年)卒で、 昭和 26 ~ 28 年の全国 躍する。

大学大会、3年連続優勝の中心 メンバーである。 卒業後、九電の主将・監督で活

新制

運を祈ります。

カミナリ声を正座のままうなだ で約十分ぐらいだったかと思っ

この間、正盛して立ち上がるま

隣に上がって早上寝ろくい 決が下ると優はさっぱりされる

だけど同級生)の失敗から、も

マン時代から学問にクラブ活動 来初めての自由外出であり、地 までかップ。ことまでくるとの 傷勝プ門限プ頭にコツンプ考え

だ!周閲野郎ノ』「門限は何時

玄関の思い出であった。

えった。ほんとうになつかしい

分際で車で帰ってくるとは何事

最後までファイトだ。 西南で経験することができた。 築くことができる。私はこれを ルフサクリファイ(自己犠牲) き、人に瞭謝する道を知り、セ こに良き師と友を知ることがで そして必ずやり遂げるんだ。 ってみたまえ。 による満足感を覚え、人の和を 新入生職君ノファイトだノ

(「西南スポーツ」昭 38 年 4 月 10 日付寄稿より)

■九州七人制ラグビー大会

第2回九州七人制ラグビー(一般・大学) が5月23~24日、平和台ラグビー場で行わ れた。

西南大学も2チームが出場したが共に2回 戦で敗退した。

- ・Aブロック 2 回戦九州電力 11 5 西南大A
- ・Bブロック 2 回戦ドンタクA 3-0 西南大B

西南ラグビーとその教訓

65期・高橋 勝



私が入学した昭和36年 は東京オリンピックを3 年後に控え、オリンピッ ク景気に沸き、経済の活 性化が進み始め国民の多 くが「上を向いて歩こ

う」を合言葉に明るい時期を迎えていた時代 でした。

一方、学内での西南体育会の現状はという と、体育会各部の期待に反して大学当局の方 針は大変厳しい環境を強いられるものでし た。各部同様、我がラグビー部も例外ではな く部員不足、経験者不足が現実のものとなり つつある時期でもありました。

戦績は昭和37年が全国大会出場、堂々の 優勝を飾り、昭和38年も全国大会出場。決 勝まで勝ち進みましたが、惜しくも敗れ準優 勝に終わりました。

翌昭和39年、この頃より戦力低下が現われ始めた時期でした。結果、インカレ初戦で福岡大と対戦、14対0で完敗。全国大会の

途が閉ざされた年となりました。

そして昭和40年、雪辱を期して今年こそはの意気に燃え、部員一丸となり、干隈グラウンドでの日々の猛練習、厳しい夏合宿、練習試合を経てシーズンイン。リーグ戦は順調に勝ち進み、そして迎えたインカレ予選。宿敵福岡大との対戦。結果は一歩及ばず13対14で惜敗。またしても全国大会出場のチャンスが断たれ無念の敗北に悔し涙を流しました。この屈辱は忘れることの出来ない思いとして私の脳裏に焼きついています。

こうして私の現役生活は栄光と挫折を体験 した4年間となりました。

社会人となった昭和40年以降は経済が活況を呈し、暮らしの中に3C(カー、クーラー、カラーテレビ)が普及し、イザナギ景気が続きました。その間大阪万博が開催され、「日本株式会社」という言葉が流行し、日本が高度経済成長からバブル経済へと発展し、経済大国としての地位を確立した時代でした。そして我々の世代は競争社会の中に身を投じ企業戦士と呼ばれ、その資質が求められる時代となりました。

果敢に攻め、守り、そして冷静な判断を要

●想い出の記



左より安武、神山、高橋、長野

し、耐える等々、正しくラグビー精神そのものでありました。様々な場面に遭遇した時、現役時代の厳しい練習に耐え試合で味わった敗北、悔し涙を流したあの時の体験が私の実社会での心の支えとして活かされたことは間違いありません。

「鉄火の修練 不屈の闘志 西南ラグビー 我等強し」 である。

卒後40余年、今想うことは屈辱をバネに 立ち向かっていくあの時の体験は人生の貴重 な教訓として私に与えられた試練だったのだ との思いです。

若き時代を振り返りみて

65期・長野 輝夫

当時、5市合併以前の北九州、若松市から 福岡の西南学院大学への進学は私にとって は、ある意味においては当然の進路決定でし た。高校3年の当時、未だ充分にテレビの普 及していない頃、知り合いの家(私の家では テレビを持っていなかった。)で西南学院の 試合を観戦する事がありました。昭和35年 頃と思います、相手のチームは忘れました が、その試合振りは強かった。

そしてそのスマートな勝ち方がすごく印象に残ったものでした。私もラグビーをやっていた事もあり、次に進んでやるならば西南だと決めた次第です。当時は八幡製鉄が社会人ラグビーでは最高峰にあり、次に近鉄、九州電力などが記憶に残るチームです。大学では矢張り早稲田、明治、慶応そして日大・立教等でした。関西大学リーグでは同志社大が圧倒的な強さでした。

運良く、入学試験に受かり入部までは非常 に順調でしたが、いざ練習に参加してみて自 信喪失の状態に落ち込みました。走りについ ていけないのです。もともと足の速さはたい したものではありませんでしたが、マー何と かなると思っていた所が、練習に入ると、と にかくスピードが無い、トップダッシュが無 い、顔が前に出せ無い、従ってボールは落と す、先輩のパスが受け取れない辛さは表現の しようのないものでした。そんなわけで西南 ラグビーのレベルの高さを体で知る事となり ました。現役時の試合で記憶に残るものとし て直ぐ挙げる事の出来るのは次の3つの試合 があります。1つは春の練習試合の九州電力 です。当時から全日本、全九州のメンバーが 揃っているチームとの試合で思わず武者震い したものです。驚いた事に春の試合とは云 え、その試合は勝利した事です。次に記憶に 残る試合は昭和36年に行われた八幡製鉄と の試合です。当時の八幡製鉄は常勝軍団で高 校の頃は英国、カナダ等のチームとの試合を 北九州戸畑の鞘ヶ谷競技場によく観戦に行っ たものです。それは西南高校のグランドでし

た。製鉄との試合は一進一退の連続で西南が 点数では押し気味に進めたかと思います。後 半に入り製鉄のメンバーの目の色が変わって きて社会人トップとして意地でも負けられない、西南としても勝てるかも知れないチャン ス、全てのメンバーが一丸となって喰らいい 荒っぽい試合となって行きました。これは勝 てるかも知れないと思ったほどの緊迫した就 合でした。結果は僅差で敗れましたが、高校 の頃に仰ぎ見た八幡製鉄と5分の試合が出来 る西南に驚きながら、私も良き経験となり競 技に対しての自信へと繋がって行きました。 第三番目は本当に忘れぬ事の出来ない悔いの 残る試合です。

1年の時、昭和37年、無敵の西南は全国大会優勝。翌年の38年は準優勝、そして39年インカレで福岡大に敗れ部の弱体化が進みました。最後の年、40年に全国大会出場を目指して全員で「走り勝つ」を合言葉の猛練習もむなしく福岡大に13対14の1点差で破れました。1球のパス、1つのタックル、1つのセイビングに悔いの残る試合でした。西南の強き時代のDNAを受け継ぎ、次につなぐ事が出来なかった反省と敗戦のの屈辱は幾ら年を経ようが今もって尚、忘れぬ事の出来ない記憶として残る、悔いある試合でありました。この試合に出場したメンバーはいずれ

も、このトラウマから抜け出せずにいるので はと推測する次第です。

そういった栄光と陰の時代を百道グランド そして干隈のグランドと走り、泥にまみれ、 ビフテキを作り ながら学生生活を送ったわ けですが、この齢になって振り返ってみる と、私の人生においてはラグビーを通して人 と人の繋がりの中で生きてきたように感ぜら れます。タテの関係、ヨコの関係を、ラグ ビーを通して体で知ることが出来、無意識的 にそういう事を大事にしながら、卒業してか らの40数年を生きてきたのではないかと思 います。又そういった関係の中で生かされて 来たような気もします。高校の時代は兄の友 人にラグビープレイヤーが多く、その関係も ありふとした事から始めたスポーッですが、 西南学院の大学4年間をとおし7年間を懸命 にラグビーをやり社会人となっては楽しむプ レーの中でラグビーを謳歌しました。その中 で上記のことなどが醸成されたものと信じて います。これらの事は期待した物でも何でも なく、結果としてこの年になって味あうもの ですが、きっとこれから広がる長い人生を持 つ後輩諸君も同じ思いをするのではないかと 思いながら筆を置かせて頂きます。



ボールを持った筆者